
幻獣観察物語～吸血鬼～

Douke

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻獣観察物語〜吸血鬼〜

【Nコード】

N8952Y

【作者名】

Douke

【あらすじ】

一人、森の中を歩く青年がいた。森の中には湖があり、小さな少女の姿があった……。

この作品は、『吸血鬼の噂話』を長編にリメイクした作品です。

パート1

一人、森の中を歩く青年がいた。

年齢は若く、おおよそ二十代前半であろう。けれどその類には、青年には似合わない傷跡が深く刻まれていた。

格好はこれまた似合わないコートを着ており、頭にはベレー帽を被っていた。

そしてその手には、旅行用のトランクがあった。

青年の歩調はどこか焦っているかのように早足だった。

まだ日は高く、近くに獣のうなり声は聞こえないので、追われているというわけではない。

ただただ、森の中を早足で歩いていた。

その顔には、期待と興奮。

しばらく歩いていると、綺麗な湖があり、その近くに一人の少女が湖の水を手ですくって飲んでいた。

しかしその格好は少しおかしく、ネグリジエを着ていて、その上に黒いマントらしきものを身にまとわせていた。

「見つけた……！」

青年は少女の姿を見た途端、少女に向かって走り出した。

足音に気付いて、少女は視線を湖から青年へとゆっくり移した。静かに立ち上がると、警戒しながら青年に尋ねる。

「……お主、何者じゃ？」

その少女に似合わない口調や雰囲気は、まるでどこか高貴の貴族のようだった。

少女の問いに答えず、青年は少女の元まで走ると、その場で荒れた息を整える。

ゆっくりと深呼吸をし、少女に向き合った。

「僕はマルク・ヴァンプール。ただの旅人さ」

「……なるほど。旅人であったか。しかしこの先にはただ森が広が

っており、森を抜ければただ山があるのみじゃ。戻って別の所を旅するがよいぞ」

「いや、僕の旅にはきちんとした目的があつてね。今ここに居る君に聞きたい事があるんだ」

「愚かな人間に答える口は持たぬが、特別に答えてやろう」

愚かな人間と聞いた瞬間、青年は確信した。

けれどそれを確認するかのように、青年は少女に尋ねた。

「君は……魔女かい？」

パート2

この世の中、人にあらずものは忌み嫌われていた。それらは全て『化け物』などの一言にまとめられ、住処を奪い、殺していた。

たとえそれが、人間にとって友好的なものであっても——だ。しかし、今でも人間に見つからないようにひっそりと生き続けている。

そして化け物の基準も大きく変わっていた。

人にあらずものだけではなく、人間という道から外れた人間も忌み嫌われるようになってしまった。

例えば魔女。

人に害するものを作り、時に妖しげな言葉を使う。

そう思われるだけで、処刑された人は数多くいる。

マルクはそういう『化け物』といったものを探し、旅をしている。

そして先日泊まった村にて、近くの森に魔女が住んでいるという

噂を聞き、その噂が事実かどうかを確かめるため、向かったのだが――。

「お主は馬鹿か？」

マルクの期待は、少女のその一言であっさりと打ち砕かれた。

「今どき魔女なぞ馬鹿馬鹿しい。お主は子供か？」

「へ……？ つ、つまり君は魔女じゃないの！？」

「そう言っておるじゃろうが」

そんな……、と言いながら手に持っていた旅行用のトランクを地面に落とした。

けれどすぐにマルクは立ち直った。

「……まあ、噂ってのは大体がデマだしね。こういう事もあるよな。ちなみにこの辺りに君の他に人はいる？」

「この辺りは我を恐れてか、人どころか獣もうつらんぞ」

「だよな……」

ふと、そこで少女の言っている事が少しおかしい事に気付く。

「……君を恐れて？ 魔女じゃないんだから、どこからどう見てもただの少女にしか見えないけど……」

すると少女は無い胸を張り、急に威張りだした。

「ふふん。我が誰だか知りたいか？」

「そりゃ、こんな所に君みたいな少女が、そんな変な格好をしているってのは疑問に思うけど」

「へ、変じゃと！？ お主の方がよっぽど変な格好じゃ！ 特にそのベレー帽！」

「なっ！？ 確かに格好が変なのは自覚してるけど、ベレー帽を悪く言うな！ それを言うなら君のそのマントだって似合っていないよ！」

「き、貴様……！」

すると、肩を震わせながら少女の体が宙に浮き始めた。

「へ……？」

「ふ、ふふ……。我を怒らせたな？ この我を怒らせたら、どうなるかその身に刻ませてやる！」

そして爪を立て、その小さな体をマルクに向かって飛翔した！

「我が名はミネル・スカーレット！ そして——吸血鬼じゃ！」

あと数センチで、マルクにその爪が届くところで……。

「ぎゃっ！」

丁度、木々の隙間から差し込む日差しが少女の顔に当たり、爪ではなくそのままマルクに体当たりするような形になってしまった。

それをマルクはもろに喰らい、二人で抱き合うような感じに巨樹に当たるまで転がった。

「ふ、ふにゅ……」

「魔女じゃなくて、吸血鬼だったのか……」

止まるさいに、思いつき頭をぶつけたマルクだったが、そんな

事を気にも留めなくて気絶しているミネルを見ていた。

このままじつくりと観察したい。だけどそれだとただの観察だ。僕がしなくちゃいけないのは、生態観察なんだから。

そう思いながら、マルクはミネルをおぶりトランクを左手に持って、森の奥に進んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8952y/>

幻獣観察物語～吸血鬼～

2011年11月27日13時49分発行